

*KCE*

*Kawaguchi Chamber Ensemble*

# 川口室内合奏団

## 第3回演奏会

2019年

5月5日(日)

13:30 開場

14:00 開演

リリア

音楽ホール

## ご挨拶

本日は川口室内合奏団第3回演奏会にご来場下さいましてありがとうございます。  
おかげさまで本日第3回めの演奏会を開催することができました。ありがとうございます。

さて、今回は、「3」にちなんだ曲を、と前半は、管弦楽組曲第3番をメインに据え  
ました。後半にはハイドンの交響曲第3番を中心に考えました。

前半のバロック音楽では、アルビノーニのオーボエ協奏曲を演奏します。楽器編成  
上なかなか演奏される機会が少ないのですが、知る人ぞ知る名曲で、シンプルな中に  
良さが光る名曲だと思います。

後半のハイドンとモーツァルトの交響曲ですが、ハイドンは3番と同時期に書かれ  
た18番を演奏します。モーツァルトは、前回、実質2番<sup>\*1</sup>の「4番 kv19」をお送り  
しましたが、さらに「5番 kv22」も演奏してしまいましたので、今回は、同時期に  
作曲された交響曲へ長調（K.Anh.223(19a)）を演奏します。この曲は1981年に発見  
されたもので、ご存じでない方も少なくないのではないかと思います。（この年私は大  
学に入学したのですが当時はアンテナが低かったせいか全く知りませんでした…。）

もちろん、いつものように、オープニングにバッハのヴァイオリンのソロももちろ  
んございます。今回も、バロックから古典初期への世界をうまく表現することができ  
皆様にお楽しみ頂けたら幸いです。

団長 山口尊実

\*1 2番は父レオポルドの作、3番はカール・フリードリヒ・アーベルの作。

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンパルティータ 第1番 h-moll より

J. S. Bach 管弦楽組曲 第3番 BWV1069 D-dur

T. Albinoni オーボエ協奏曲 Op. 9-2 d-moll

<休憩>

F. J. Haydn 交響曲第3番 G-dur、第18番 G-dur

W. A. Mozart 交響曲 F-dur K.A.223(19a)

## Johann Sebastian Bach

### 無伴奏ヴァイオリンパルティータ第 1 番 短調 BWV1002 より Allemanda - Double、Corrente - Double

この曲は、1720 年、バッハ 35 歳の「ケーテン時代」に作曲された。このケーテン時代（1717~1723 年）は、バッハがケーテン公レオポルト伯爵家の宮廷楽長をしていた時期で、バッハのオルガン以外の重要な器楽曲のほとんどがこの時期に作曲されている。

無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータは、第 1 組曲から第 3 組曲の舞曲集である。第 1 番は 4 つの舞曲からなり、それぞれに Double（ドゥーブル＝装飾的な変奏曲）がセットになっている。Double は変奏曲なので、基本的に同じテンポで演奏するのが好ましいだろう。

#### Allemanda（アルマンド）4/4 拍子

「ドイツ風」という意味で 16 世紀フランスでは中くらいの速さの 2 拍子の舞曲であったが、バッハの時代には踊りと関係のない遅めの 4 拍子の曲になっていった。遅めと言っても拍感を損なうほどのテンポとなつてはいけない。重音がたくさん使われていて、付点のリズムと 3 連符の組み合わせが特徴。



Double 2 音スラーの 16 分音符の連続。



#### Corrente（クーラント）3/4 拍子

フランス起源の速いテンポの舞曲。8 分音符のみの連なり。舞曲の性格上 3 拍子だが、音楽的には 6 / 4 拍子の複合 2 拍子となっている（譜面には短い小節線が書かれている）。重音は出てこないが移弦が多くボーイングの技術を要する。



Double プレスト。技巧的な、勢いのある曲。



## 「管弦楽組曲」 第3番 ニ長調 BWV1069

バッハは4曲の組曲を単に「序曲」(Ouverture)としていたことは前回のプログラムに書いたとおりである。新バッハ全集では「4つの序曲(管弦楽組曲)」ということも紹介した。一度広まってしまうと、本来の正しい姿に戻すのには時間と労力がかかってしまうのは、例えば、シューベルトの「未完成交響曲」は7番で「グレート」が8番であるとか<sup>2</sup>、ベートーヴェンは5番を「運命」と命名していないなど枚挙に暇がない<sup>3</sup>。しかしながら、チラシ等に「バッハ 4つの序曲」と記載しても、現在の日本ではおそらく分からないと思われるので「管弦楽組曲」を使用した次第である。

さて、「4つの序曲(管弦楽組曲)」は、1番から4番まで作品番号が1066から1069が付られているが、その順に作曲されたのではない。前回の「第2番」(フルート協奏曲のようなD-dur)がもっとも新しいことは分かっている。つまり、「2番」が実は「4番」なのである。では今回の「3番」は……?<sup>4</sup>

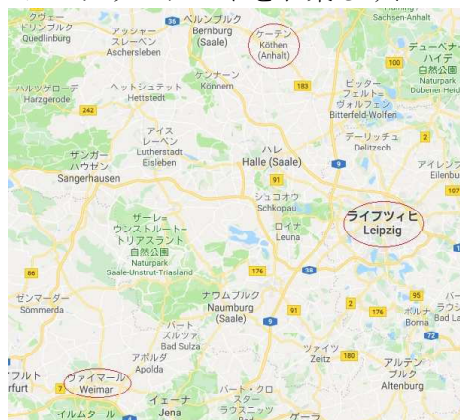
バッハの作品番号はBWVと呼ばれているが<sup>5</sup>、これはBach-Werke-Verzeichnisの略で、音楽学者ヴァルフガング・シュミーダーが1958年に出版したものである<sup>6</sup>。このBWVは作曲順ではなく、ジャンルごとに付けられた<sup>7</sup>。これは、加筆、訂正、転用、編曲<sup>8</sup>、紛失、散逸による。当時、出版が一般化していなかったことはもちろんだが、なにより、バッハは一時期「忘れられていた作曲家」だったということも大きいだろう。それを「再発掘」したのはメンデルスゾーン(1809-1847)なのだが、詳細については割愛させていただく<sup>9</sup>。作品番号というと、年代順、という先入観があるかもしれないが、ジャンルごとの分類もある意味便利である<sup>10</sup>。

さて、今回の第3番は初稿版の弦楽合奏で演奏します<sup>11</sup>。この曲を人生で初めて聞いたとき、なぜエア(アリア)が弦楽合奏なのかという疑問も持たずにそういうものだと理解してしまっていたが、「ティンパニやトランペットはライブツィヒでの再演で付け加えられた」と言われてみれば、その「とってつけた感」から逃れられなくなってしまう。弦楽合奏版の演奏をお聴きになってのご感想をぜひお聞かせ下さい<sup>12</sup>。

では、バッハの3時代、Waimar(1708-1717)、Köthen(1717-1723)、Leipzig(1723-1750)を基本的知識として持っていただいて、次回演奏会のプログラムノートをお楽しみに!




ドイツ Leipzig



ヴァイマール ケーテン ライプツィヒ

## 注

- \*2 さすがにこれはもう定着した？
- \*3 シューベルト自身による標題、第4番「悲劇的」(Tragische) D417 や、ベートーヴェン自身による表題、「田園」(Pastorale) については、第1回プログラムで触れたが、ベートーヴェンの交響曲第3番の副題「Eroica (英雄)」は、作曲者自身が消したにも関わらず現在その名で呼ばれ続けていることについてみなさんはいかが思われますか？
- \*4 このあたりのことについては、次回演奏会のプログラムで触れる予定です。乞うご期待！？
- \*5 ぼーっとしていると BMW と間違えるかも？ (それはないか。。)
- \*6 若かりし頃、FM で「… BWV バッハ作品番号〇〇〇〇、演奏は…」というフレーズを何度も耳にしていたことを思い出す。
- \*7 例えば、BWV 1-231 はカンタータ、モテット、BWV 525-771 はオルガン曲、BWV 772-994 はオルガン以外の鍵盤楽器の曲、BWV1041-1065 は協奏曲などである。ちなみに、マタイ受難曲は 244、ヨハネ受難曲は 245。
- \*8 今回演奏する「管弦楽組曲第3番」は今回の演奏のように、弦楽だった。
- \*9 1829 年、二十歳のメンデルスゾーンはマタイ受難曲を編曲し、自らの指揮により蘇演を果たし、成功を取めた。(しかしながら、かなり「ロマン派」的な編曲であった。)
- \*10 モーツァルトのケッヘルのような分類ももちろん便利である。作曲技法の変化等も分かっているのだが、後になって本人の作でないと分かったとき、あるいは、「新たな曲」が見つかった時に困ってしまう。前回の第2回の演奏会で私たちが飛ばしたモーツァルトの交響曲2番、第3番や、今回の交響曲へ長調のように。
- \*11 本当はハーブシコードも入るのですが、諸般の事情で……。

- \*12  原典復刻版の CD としては 2002 年録音の Nova Stravaganza, Siegbert Rampe の演奏がある。



同様に、2010 年録音の Il Fondamento, Paul Dombrecht があり、25 周年記念 box が 2014 年に発売されている。



弦楽合奏版ではないが、2011 年の録音の Freiburg Baroque Orchestra の演奏もテンポもよく心地よい。



同じく、弦楽合奏版ではないが、2012 年の録音の La Petite Bande, Sigiswald Kuijken の演奏も心地よい。

以上様々な演奏のあるなか、私たちの演奏を求めてみました。いかがでしたでしょうか。



・ 序曲 4/4 - 2/2 - 4/4



前述の通り、新たな（逆に「古い」といふべきか？）といふか（おそらく）本来の演奏（であろう）を聞くと、リズムカルでテンポもよく、生き生きとしている。「昔の演奏」を聞くと、今となつては冗長で聞くのが辛く、もう戻れないのは私だけ？



中間部は得意のフーガ。そして、再び冒頭の音楽が戻ってきて序曲は終わる。1 番も 2 番もそうだが、序曲にかなり力を入れていることが分かるバッハらしい曲である。

・ Air エール (エア、アリア) 4/4



イタリア語のアリアは音楽の節、旋律を意味し、空気、雰囲気の意味もある。バロックの場合、印象的な旋律が豊かに歌われる短い曲で、テンポはアンダンテが相応しい。

・ ガヴォット 2/2



華やかな trumpet の響きが頭の中にあるので、それを知っていると物足りない気がしないでもないが、弦楽合奏でも十分に楽しめる。ガヴォット II の後、再び I に戻って終わる。

・ ブーレ 2/2



ガヴォットに続いてアウフタクトから始まる舞曲だが、小節後半から次の小節の冒頭へのスラーとそうでない部分の弦楽器ならではの違いを楽しんで下さい。

・ ジグ 6/8



ガヴォット以降の舞曲がすべてアウフタクトで始まっていることにお気づきだろう。6/8 もとらえ方としては 2 拍子だ。舞曲から純粋音楽への橋渡しがうまく表現できると嬉しい。

# Tomaso Giovanni Albinoni

## Concerto for Oboe Op.9 No.2 in D minor

トマゾ・ジョバンニ・アルビノーニ

オーボエ協奏曲 作品9-2 ニ短調

アルビノーニは1671年6月8日ヴェネツィアに生まれ、1751年1月17日に没した。J.S.Bachが1685年3月31日～1750年7月28日なので、ほぼ同時代を、イタリア（当時はヴェネツィア共和国）で生きていた。バッハもアルビノーニの音楽をよく知っており、3曲のフーガ（BWV946, 950, 951/951a）でアルビノーニの主題を使用しているほか、生徒の和声の練習にアルビノーニの通奏低音の進行をよく利用した。

アルビノーニは生前52ほどのオペラを作曲していたが、大半が紛失しており残念な限りである。没後は器楽曲の作曲家として有名で、ヴァイオリンソナタ集 作品6（1711頃）、5声の協奏曲 作品7（1715）、3声のパレットとソナタ 作品8（1722）、5声の協奏曲 作品9（1722）、5声の協奏曲 作品10（1735-36）などがあり、今回は作品9の「12の協奏曲集」の中から2番のオーボエ協奏曲をピックアップした。今後、作品7の「12の協奏曲集」も含めて、オーボエ協奏曲あるいは二本のオーボエのための協奏曲を演奏していきたい。

第1楽章 Allegro e non presto アレグロ エ ノン プレスト ニ短調 2/4 拍子



リトルネッロ形式で、弦楽合奏の tutti（全体合奏）で始まり、そのあとにオーボエソロが続く。最後に冒頭のメロディが回帰し、終了する。

第2楽章 Adagio B-dur 変ロ長調 3/4 拍子



第1楽章同様弦楽合奏で始まる。1楽章のニ短調（へ長調の平行調）からフラットが一つ増え、変ロ長調（へ長調の下属調）となっており落ち着いた感じ。だが、従来の遅い演奏ではなく、動きのあるアダージョで。

第3楽章 Allegro d-moll アレグロ ニ短調 6/8 拍子



再びニ短調に戻り、軽快に進んでいく。譜例のアウトタクトを入れて3小節めの下降音型を楽譜通りに取るか、(cis - h)、旋律的短音階に取るか (c - b) 悩んだのだが、楽譜通りにすることにした。私の耳には旋律的短音階がこびりついているのだが…。(古い演奏?)

## フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Franz Joseph Haydn, 1732- 1809)

ハイドンは 1732 年 3 月 31 日生まれで、1740 年ウィーンのシュテファン大聖堂の聖歌隊員として 9 年間働いたのち解雇され、定職を持たず苦勞したのだが、そんな中、作曲を本格的に勉強し、C.P.E から影響を受け、1757 年ごろ、ボヘミアのモルツィン伯爵の宮廷楽長の職に就いた。ここで最初の交響曲である交響曲第 1 番はじめ約 15 の交響曲などが書かれた。(前回演奏した 37 番もこの時期の作である)

今回は、モルツィン時代、3 番と 18 番の二曲、ともにト長調をピックアップしました。特に 18 番の構成はなかなか面白いでしょう。

### ・ Sinfonia No.3 G-dur 交響曲第 3 番 ト長調

第 1 楽章 Allegro G-dur アレグロ ト長調 3/4 拍子 ソナタ形式



g - d - e - fis (ソーレーミーファ#) のテーマ (主題) に低音の軽快な動きが加わり曲が始まり、ホルンによって推進力を得て曲が進んでいく。第 2 テーマはオーボエに始まる。

第 2 楽章 Andante Moderato g-moll アンダンテモデラート ト短調 2/4 拍子 ソナタ形式



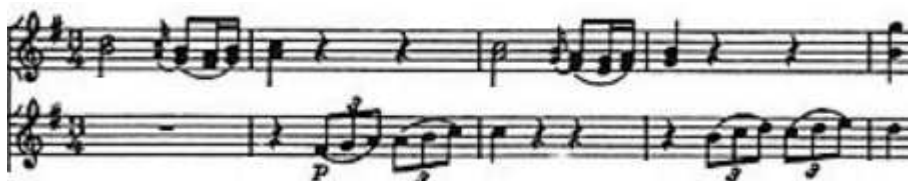
アウフタクトで始まるちょっと暗めの曲。ハイドンお得意の弦楽合奏をお楽しみ下さい。

第 3 楽章 Menuetto G-dur メヌエット ト長調 3/4 拍子



楽譜を見ておわかりのようにカノンになっている (聞いてもすぐ分かるが…)。20 小節からは低音が先に来るので面白いのだが、ぼーっと聞いているとわからない?

Trio



管楽器と弦楽器の掛け合いが楽しい。(難しい、とも)



第4楽章 Finale Alla breve G-dur フィナーレ ト長調 アラブレーベ (2/2 拍子)



ご覧のように（これまたお聞きになれば分かるように）フーガとなっている。1stVn → 2ndVn → Viola → Vc&CB → Hr (+1stVn) → Ob (+1stVn) ……と進行していく。第1楽章を彷彿とさせる全音符4つのテーマに対して、軽快な対旋律があり、この二つが絡み合っ  
て進行していく。第二テーマも見え、展開していくあたりは、ソナタ形式のようにも見える。

・ Sinfonia No.18 G-dur 交響曲第18番 ト長調

第1楽章 Andante G-dur アンダンテ ト長調 2/4 拍子 ソナタ形式



2ndVn のアンダンテの軽やかなメロディで始まる意表を突くオープニングである。ソナタ形式ではあるのだが、展開部から再現部に戻るところがはっきりしないのは、ソナタ形式が完成していないのか、ハイドンらしいユーモアなのか。あなたはどのように思います？

第2楽章 Allegro G-dur アレグロ ト長調 4/4 拍子



第1楽章にふさわしい軽快な曲。ここでもホルンのファンファーレが心地よく響く。ソナタ形式のようでもあるけれど、二部形式ですね。このアレグロを1楽章にすると、アンダンテが2楽章で、メヌエットの後に4楽章を追加しなくてはならないからやめた？

第3楽章 Menuet G-dur メヌエット ト長調 3/4 拍子



メヌエットではあるけれど、3番の3楽章のようなトリオがなく、中間部は g-moll (ト長調の同主調のト短調) に転調して始まり、冒頭に戻る形となっている。第2小節の形が 22, 66, 86 小節に出てくるのだが、微妙に違って、その違いをうまく表現できるよう頑張ります！（興味を持たれた方はスコアを参照してください。imslp で入手できます。）

## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

(Wolfgang Amadeus Mozar 1756-1791 年)

モーツァルト親子は 1763 年 6 月に「西方への大旅行」に出発し、1764 年 4 月にロンドンに到着した。ここで父が病に倒れた間に、息子ヴォルフガングが交響曲第 1 番を書き上げ、1765 年 2 月 21 日に初演されたといわれている。今回演奏するへ長調交響曲は同時期に作曲され、第 1 番のと同時に初演されたらしい。

### ・ Sinfonie in F Kanh.223 (19a) 交響曲へ長調

この 19a は、1980 年に交響曲第 4 番 K19 の楽譜の裏に Vn パートの冒頭が父レオポルドによって書かれていることがわかり、1981 年、ミュンヘン国立図書館に持ち込まれた古い楽譜によって、3 楽章のシンフォニアが「発見」された。すでに作品番号はかなり整理されてしまっていたので、改めて振り直すことはせず、4 番 K19 より前の作品であろうということで、19a となった。(現時点では、これが実質 2 番！)

第 1 楽章 Allegro assai F-dur アレグロ アッサイ へ長調 4/4 拍子 ソナタ形式



軽快なメロディが低弦の 8 分音符と 2ndVn & Va の 16 分音符に乗って進行していく。展開部ではお約束どおり C-dur に転調して展開していく。再現部では冒頭のテーマがないのでそれはそれでおもしろい。(モーツァルトだから許される?)

第 2 楽章 Andante B-dur アンダンテ 変ロ長調 2/4 拍子 2 部形式



へ長調 (F-dur) の下調の B-dur。アウフタクトから始まる 2 拍子で、まさに歩いて行きたくなるような曲。(andante は andare の進行形。英語で言えば going)



このメロディに対して Va が左のように演奏するのだが、これがまた Va 泣かせというか冥利というか…。

第 3 楽章 Presto F-dur プレスト へ長調 3/8 拍子 ロンド形式



へ長調に戻り、アウフタクトから始まる軽快な 3 拍子。4 小節単位なので 4 拍子のようにも聞こえる。冒頭の 8 小節のフレーズが繰り返し現れるロンド形式だが、後半の中間くらいである「仕掛け」があるのだが、これがなかなか効果的でよい。

Vn solo & コン・ミス 藤本舎里

3歳より才能教育研究会にてヴァイオリンを始める。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第2位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演の他、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

オーボエ・指揮 山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、English Horn:Bulgheroni  
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving (Resuce Diver)、筋トレ、バドミントン etc.

member 敬称略

vn 1st	藤本舎里、渡邊昭子	ob	大倉淳、大山明子、山口尊実
2nd	大西由梨、豊島美紀	hr	林義昭、松沢宗一郎
va	高橋良暢		
vc	大和伸明		
cb	森田章		

◎団員募集しております。詳細はHPにて！

次回演奏会のお知らせ

2020年2月24日(月)振替休日 14:00 開演 音楽ホール  
曲目(予定)

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンパルティータ第1番より

A. Marcello オーボエ協奏曲ハ短調

J. S. Bach 管弦楽組曲第4番

F. J. Haydn 交響曲第4番、108番

W. A. Mozart 交響曲ト長調 K.Anh. 221 (45a) Old Lambach

KCE

川口室内合奏団

Kawaguchi Chamber Ensemble

HP: <http://kce.saitama.jp>

(「kce.saitama」で検索！)

mail: [bur@kce.saitama.jp](mailto:bur@kce.saitama.jp)